

体育・保健体育分科会

I 研究のあゆみ

4月24日(木)	2025年度名教組教研オリエンテーション (2025年度名教組教育研究活動の進め方)	【教育館】
5月上旬	第1回分科会 (指導者決定通知と研究推進について)	【紙面開催】
5月下旬～9月	個別に研究内容の検討	
7月25日(金)	第2回分科会 (発表に向けての打ち合わせ)	【白鳥小】
9月上旬	個別に市集会発表内容の検討(リハーサル)と打ち合わせ	【各会場】
9月20日(土)	第75回名古屋市小中特別支援学校教職員教育研究大会	【ウインクあいち】

II 研究協議の概略

「体育でどのような子どもを育てるか、自ら考え行動する子どもをどう育てるか」という大テーマのもとに、「わかる・できる・かかわることを大切にした授業づくり」「ねばり強く学ぶことをめざした教材や指導方法の工夫をした授業づくり」を追究した貴重な教育実践が、31本のレポートとして報告された。

運動領域別では、器械・器具を使つての運動遊び、器械運動(11本)、ゲーム、球技(10本)、走・跳の運動、陸上運動、陸上競技(10本)であった。

多くの実践で、「仲間とのかかわりを通して考え、試させることで技能の向上に結び付けたり、動きの高まりを実感させたりする学習活動の工夫」「自己の課題を見付けさせたり、課題に向き合い解決に取り組ませたりするために、多様な練習の場の設定や練習方法の工夫」「運動の特性を大切にした授業づくりと教員支援」「評価活動の工夫」等を手立てとした報告がされた。また、ICT機器(タブレット端末)を利活用して、効果的に評価活動に生かし、動きの分析をしたり、作戦を考えたりすることや、学習履歴として自らの動きを映像や静止画でICT機器に残し、課題発見に生かすこと等により、研究のねらいに迫ろうとする報告が多く見られた。

III 今後に残された課題

- 「わかる・できる・かかわることを大切にした授業づくり」では、「わかるができない」や「できるがうまくかかわれない」といった課題が挙げられた。さらに運動が苦手な児童生徒にとっては、客観的視点である運動についての説明と主観的視点である運動自体とが混同し、ICT機器を利活用したとしても映像としては「そうなればよい」ということは理解しているが、それが「自らの身体的な動きや感じ」とはつながっていないことがある。そこで、運動が苦手な児童生徒でも課題を解決するために豊かに対話を行い、仲間とのかかわることができるようにするだけでなく、ICT機器から得た情報や仲間からのアドバイスを練習に生かし、自らの学習を調整しながら繰り返し運動に取り組ませる必要がある。そのためには、明確な目的をもたせることや、気付きを促す発問、教員支援など、「わかる・できる・かかわる」をそれぞれどのように考え、つなげていくとよいかについて、今後も検討が必要である。
- 「ねばり強く学ぶことをめざした教材や指導方法の工夫をした授業づくり」では、ICT機器(タブレット端末)の利活用により、その効果が期待される反面、振り返りの時間が長くなり、十分な運動量の確保につながらなかった点や、映像で確認しても「できた」という成功体験、「これなら自分もできる」といった有能感を最後まで感じさせることができなかつた点があった。いずれも、工夫した学習の取り組みせ方を念頭に置いたうえでの授業づくりをしていく必要があると考える。そのためには、めざしたい児童生徒の姿に向けて、課題や自らの状況の認識だけでなく、解決のための方法を認識させる教員支援が大切となる。